

はじめに

いまぼくがあるは、みんなが語り、書いてくれたたまもの

2011年の夏が終わるころだった。

「アルパインクライミングにまつわる連載をやってくれませんか？」

そう言われて、正直、戸惑った。「いいのか？ ぼくで」。そもそも、アルパインクライミング（以下、アルパイン）について何か偉そうに書けるほどの経験も蓄積もぼくにはまだない。だいたいこれまでのぼくの文章なんて、そのときは「うむ、素晴らしい」と自画自賛しても、活字になったものを手に取ったとたん、「クワーツ、こいつはなにを書いてんだ！」と怒りさえ覚えることもしばしばだ。

返事を保留したまま、ぼくはその秋、北米のクライミングトリップに向かったのだった。

やはり大きな山へ

2009年12月からの半年以上にわたる怒濤のアルパイン生活。カナディアンロッキーで四カ月みっちり登り込み、そのままローガン南東壁、間髪入れずにラトックI峰北壁……。

それらは最高の充実感といくつかの貴重な経験を与えてくれたが、それと同時に、ぼくはそのアルパ

インという行為自体にかなり疲れ果ててしまった。

「もうしばらく寒くて危険なところはいいや」

というわけで、2010年夏以降のぼくは、寝ても覚めても家の近所の小さな岩ばかりを触っていたのだった。ボルダリングは素晴らしい。シンブルで、気軽で、それでいて本気になれる。頑張ってもなかなか強くなれないのが問題といえば問題だけど、弱くても楽しいものは楽しいのである。

だけどそうやってしばらくのあいだ、雪や氷や、ちょっと危険な香りのする場所とは無縁な状態に身を置いていると、そのうちに自然と「やっぱり大きな山に行きたいなあ」と思うようになるのだ。というわけで（短絡的だなー）、2012年のパタゴニア遠征が決まったのであり、そのトレーニングのための北米クライミングトリップだったのだ。

このトリップはそれほど大きな成果があったわけでもないのだが、それでもやっぱり行ってよかったと思えるのは、なによりモチベーションがうなぎ登りに上昇したことである。年明けのパタゴニア、その先に続く世界中の山々……。またいつものワクワク感が訪れて夜も眠れなかった。

心に響くクライミング談議

2011年10月下旬、ユタ州キャッスルバレーにあるジェイ・スミスの家を訪れた。ジェイ・スミスといえば、元祖オールラウンダー。ヒマラヤの大岩壁からインディアンクリークのショートルートにい

たるまで、世界中に彼の痕跡のない場所はないといっても過言ではない。

あれは2009年5月のことだった。ぼくらの滞在するアラスカはデナリのカヒルトナ氷河に、ジェイとパートナーのジャック・タックルはセスナで颯爽と現れた。

「よお、三本の新ルートを登ったぜ。マジで楽しくてよお！」

パートナーの鳴海玄希がぼくにポツリ、「なんですか？ あの方ファンキーなオヤジ」。そう、当時ジェイは五三歳、ジャックは五五歳。だれもが悪コンディションに手を焼き、そのうちにダレはじめてさえたその年のアラスカで、このオヤジたちはサリとすごいことをやってのけ、「じゃあ、また」と去っていった。それ以降、ジェイとジャックはぼくにとつてのヒーローとなったのだ。

秋深まるキャッスルバレーの朝。五五歳になったジェイは、相変わらずのゴツイ手を差し伸べ、丸眼鏡の奥にキラリと光る眼差しをぼくに向けて一言、「いまから未踏のルートを登りにいくんだ」。ぼくと妻の千裕もその日、数年前にジェイが初登したクールなマルチピッチルートを、ジェイの妻であるキティ・キャルフーンと一緒に登り、最高の一日を過ごすことができた。

その夜、ジェイとキティとぼくたちはビール片手にフットボールを見ていたが、そのうちフットボールにも飽きると、自然と会話はクライミングへとシフトしていった。その日ジェイが登った新ルートの話、ぼくたちの登ったルートの話。それから決まって話はワールドワイドになる。彼らのクライミング遍歴はとてつもない。その話を聞いているだけでもぼくにとつては貴重なんだけど、それよりも彼らは

ぼくの話を開きたがる。そして、少しでも彼らの興味のアンテナに引っかかると、もうクライミング談議はとまらない。アラスカ、ローガン、カンテガ、ラトック……。ぼくが訪れた山は、ことごとく彼らが先鞭をつけている。

「ジャンボ（図体がでかいのでついたぼくのあだ名）、お前のローガンはいいクライミングだったな、うらやましいよ。俺はいまでもあんな大きな山を登りたいと思っている。でも体がついていかない、それが現実だ」

「おいおい、きょう新ルートを登ってきたばかりじゃないか、ジェイ！」

「ワッハッハ、そうだったな。でも壁の大きさがぜんぜん違う！」

「いやいや、あんたのクライミング馬鹿っぷり、それこそがすごいよ」

どうやったらあんなふうに素敵なオヤジになれるだろうか？ きっと、ノウハウなど何もない。ただクライミングが好きなのだ。それこそが彼を、その歳よりも若く見せているのだろう。

話は尽きない。彼は偉そうに昔話を語ったり、ピントのずれたことをダラダラと話すために、ましてやぼくをおだてたりするために家に迎え入れているわけではない。ただ単に、楽しいのである。一緒に夢を語るのが好きなのだ。それは、きっと四〇年前の少年時代から何ひとつ変わっていないのだろうな。そう容易に想像させる姿であった。



ジェイ・スミス、彼の奥さんキティと。キャッスルバレーで（写真＝横山千裕）
*以下クレジットのないものは著者撮影・提供

キャッスルバレーでの誓い

これはなにもアルパインに限った話ではないけれど、すべてを凌駕するのはモチベーションであるとぼくは思う。モチベーションは、想像力をかき立て、トレーニングに精を出させ、実際に一步を踏み出させるための原初的なツールである。

では、そのモチベーションはどこからくるのか？ 自分の目で山を見て自分の心で感じる。それこそがいちばん大切ではあるけれど、それ以外にもぼくは多くの仲間からいろいろなことを学んだし、彼らと一緒に山に行くことによってここまで成長できたと思っている。そして彼らのクライミングや山への熱い思いをじかに聞き、時に嫉妬を抱き、多くの先人の物語を読み、写真に心震え、そこからさらに大きな想像力をはたらかせて新たな対象を見つけてきた。みんなが語り、書いてくれたたまものである。

一方で、山には危険がひそんでいる。盲目的なモチベーションが危険への嗅覚を消してしまっている可能性だって否めない。ジェイのもうひとつすごいところは、四〇年以上あれただけの経験を経てもなお、生き続けていること。彼を一目見れば、溢れんばかりのギラギラとした生命力を感じるはずだ。それも大事な要素だとは思うけど、でも、それと同時に、数々の経験を経たからこそ得られた生き延びるための知恵のようなものだってあるにちがいない。

ぼくにどれだけの積み重ねがあるのかはわからないし、そもそも山に「絶対」はない。でも自分がし

ていること、考えていることをいまここで整理してみるのには、ぼく自身がこの先も登り続けるためにも大切だと思う。そのことによつて、それまで自分が気づかなかった何かに気づくかもしれない。もしかしたらそれは、だれかにとつての反面教師になるかもしれない。やってみる価値はある。なにより、自分自身のモチベーションのために。

ジェイを見て思う。いまでもクライミングコミュニティの中にいて、話の中心の一人としてうまい酒を呑んでいる彼はカッコいい……。

よし、ぼくの「アルパインクライミング考」をいっちょ書いてみるか。ぼくはキャッスルバレーに聳える岩塔に向かってそう誓ったのであった。

*1 **ローガン** (5959m) ... カナダ・ユーコン準州、セントイライアス山群に聳えるカナダ最高峰ならびに北米第二の高峰。いくつかのピークによって構成されており、今回ぼくたちが登った東峰は標高五九〇〇mで山群第二の標高。半端でなく高く、とんでもなく天気の良い山でも有名である。

*2 **ラトックI峰** (7145m) ... バキスタン、カラコルム山脈のチョクトイ氷河上に巨大な北壁を擁する怪峰。初登は南側から日本隊。北壁は合わせて三〇隊以上が挑戦しているが、いまだに山頂まで到達した者はいない。

*3 **ボルダリング・ボルダー** (石ころ) を登る行為。ロープやギア類を使わず、身ひとつで上を目指す。一般的にはクラッシュパッドと呼ばれるマットを地面に敷き、落ちればそのマットによって衝撃が吸収されるという仕組みでトライするが、ごくまれにマットを使わずに巨大なボルダーを登る変人もいる。なお、人工壁を登る行為も最近ではボルダリングと呼ぶらしいが、これには少し抵抗がある。石ころを登るからボルダリングだろ！

*4 **ジェイ・スミス** (Jay Smith) ... アメリカが誇る元祖オールラウンダー。これまでに世界中で二〇〇〇近くのルートを初登してきた彼は、ユタ州キャッスルバレーに住み、いまでも近くに眠る手つかずのクラックを登り続けている。インディアンクリーク・ユタ州南部、モアブという町の南にあるクラック天国。どれだけ車で走れども砂岩の岩塔、岩壁が延々と続く。いったいどれだけのルートがあるのかだれも知らない(はず)。だけど、モアブ周辺には似たような未踏の岩塔がさらに数十倍も広がっているのだ。恐るべし。

*6 **デナリ** (6191m) ... 北米最高峰。かつてはマッキンリーと呼ばれていたが、2015年夏、地元先住民によって呼ばれてきたデナリに名前が正式変更となった。デナリとは「偉大なもの」を意味し、たしかにタルキートナの町はずれから眺めるこの山の巨大さは、見る者に感動を与える。南面には標高差三〇〇〇m近くにわたって岩壁が落ち込み、良質の花崗岩に走る氷をたどるルートが多い。標高、スケール、難易度、気象条件を考えれば、南面のクライミングはヒマラヤの大岩壁に匹敵するだろう。山頂はふたつ。南峰が最高点だが、ぼくは北峰が好きだ。ルート上で人に出会うことはほとんどなく、普通は見ることのできない北面の雄大な景色を独り占めできる。

*7 **ジャック・タックル** (Jack Tackler) ... 柔和な目と口髭が印象的なダンディなオヤジ。ジェイと並ぶ生粋のオールラウンダー。ジェイとジャックの二人が組めば、世界中に足跡を残していない場所はないといわれる。モンタナ州在住。

*8 **鳴海玄希** (なるみげんき) ... 北海道出身の元祖アイスクライミングチャンプ。クライミングよりも無類の酒好きとして有名。玄希という名前は「希にみる友人」という意味らしいが、たしかにほかのクライマーとは一線を画す独特の空気感がある。小学生のころだけはモテたらしいが、だれも信じない。

*9 **マルチピッチルート** ... 複数のピッチ(確保支点から次の確保支点までの区切りのこと)で構成されるルートのこと。普通のロープは五〇〜七〇mなので、それよりも壁が大きければ必然的にマルチピッチルートになる(ちゃんと確保さえしていれば)。また、登るラインが屈曲している場合は、一気に登るとロープの流れが悪くなるのでピッチを切ることが多い。なるべく疲れないように、岩棚などでピッチを切る。だから、クライマーはどこでピッチを切るべきなのか下から観察しておく必要がある。

*10 **キティ・キャルフィン** (Kitty Calhoun) ... ぼくが最初にキティに会ったのは2009年。焚き火のそばではじめて会話をしたときは、とても五〇過ぎのおばちゃんとは思えないほどスタイルがよくて若々しかった。まさかこの人がかつてヒマラヤ登山をバリバリこなしていたとはだれも信じるまい。ジェイに負けず劣らずファンキーで、気さくだが芯の強い女性。

*11 **カンテガ** (6782m) ... エベレスト初登頂で有名なエドモンド・ヒラリー卿が1964年に初登頂。北壁と呼ばれる壁は二つあって紛らわしいが、一般的にはエベレスト街道から見える懸垂氷河で覆われた方を指す。ぼくたちがトライしたのは、ヒンクラー谷からアブローチ主峰にダイレクトに突き上げるツルツルの壁の方。